

1. 教育に対する責任

私は、生活文化学科子ども生活専攻に所属し、保育士資格や幼稚園教諭二種免許状取得における子ども生活専攻の健康・運動分野の科目及び食物栄養学専攻の共通教養科目を担当している。そのことから、子どもの健康福祉や幼児体育、レクリエーションの専門性を活かし、保育内容の健康、健康指導法を担当し、また健康スポーツⅠ・Ⅱ、レクリエーション論を通してレクリエーション・インストラクターの養成、そして生活文化各論では子どもの生活文化についての理解を深めることを重視し、子どもの健康福祉および健康教育に取り組んでいる。

科目	科目名	形態	単位数	開講時期	
人と文化	健康スポーツⅠ	演習	1	1年生前期	必修 レクリエーション・インストラクター
	健康スポーツⅡ	演習	1	1年生後期	必修 レクリエーション・インストラクター
保育の内容・方法に関する科目	保育内容（健康）	演習	1	1年生前期	保育士（必修） 幼稚園教諭（必修）
	子どもと健康	演習	1	2年生後期	保育士（必修） 幼稚園教諭（必修）
保育実習	保育実習指導Ⅰ	講義	2	1年生通年	保育士（必修）
教育実習	教育実習	実習	5	1.2年通年	幼稚園教諭（必修）

授業において、学生らが学術的な論点で学びを深めていくことも教育の責任である。よって、以下のように 2024 年においても自身の研究活動が学生らの学びの一助となるよう研究活動にも取り組んでいる。

廣瀬 団・前橋 明：近年の幼児の公園利用に関する保護者の意識 レジャーレクリエーション研究 103 号, pp. 37-44. 2024.

門倉洋輔・廣瀬 団：外あそび文献研究－学童保育の外あそび実態調査に向けて レジャーレクリエーション研究 100 号, pp39-44. 2024.

廣瀬 団：運動あそびへの環境づくりの工夫と課題 第 20 回日本幼児体育学会報告書 pp.21-22. 2024.

廣瀬 団：幼児の生活習慣と親子体操 食育学研究 Vol.18,pp58-59. 2024.

幼児の生活リズムに対する保護者意識の変化, 第 77 回日本保育学会報告書 K-D-1-04, 2024.

前橋明・野村卓哉・廣瀬 団他：外あそび用語集－子どもたちの健全な育ちを願って－, 大学教育出版, 2024.

前橋明・野村卓哉・廣瀬 団他：人を育む幼児体育の魅力と役割, 大学教育出版, 2024.

2. 教育の理念

教育活動において、以下の3つを理念として上げる

①保育者として必要な基本的知識、技術の伝達

・保育現場で必要とされる健康・運動に関する知識や技術を、講義と実技を通じて体系的に伝える。

・基本的な子どもの発達段階の理解を深め、適切な運動指導や健康管理の方法を習得させる。

②実社会を意識した理論と実践の提供

・保育の現場で直面する課題を具体的なケーススタディを用いて学び、実践的な解決能力を養う。

・附属ますみ幼稚園、ますみ保育園や地域の保育施設と連携し、学生が現場体験を通じて理論を実践に結びつけられるよう指導する。

③自ら考え、学び取り、自ら行動する力の醸成

・アクティブ・ラーニングを積極的に取り入れ、学生が主体的に学ぶ環境を提供する。

・ディスカッションやグループワークを通じて、多様な視点を持ち、課題解決力を高める。

3. 教育の方法

①遊びの重要性と体験学習

現代の子どもたちは『遊び』の必要条件である「3つの間」(時間・空間・仲間)を確保することが難しくなっている。この現状を踏まえ、学生自身にも様々な『遊び』を体験し、遊びを通じた関係の喜びや身体を動かす大切さを実感してもらうことを目的としている。「運動遊び」や「保育内容健康」の授業では『遊び』などといった子どもたちの現状を把握することも重要であり、理解した上で実践に入るようにしている。言葉だけでは実感しにくい内容でも映像を通して学習することで遊びに関する現代の子どもの様子や活動の場の提供の環境設定について学生がイメージ出来るようにしている。

②保育者としての関わり

保育現場では知識や技術だけでなく、子どもや保護者、職員、地域との関わりが求められる。学生には、「気持ちのやりとり」の重要性を理解し、相手を尊重する姿勢を身につけてもらうために、振り返り・シェアリング・協議の時間を確保し、学びの深化を図っている。私の授業の主活動は「からだを動かす」ことであるが、実際に活動していく中で、学生自身もたくさんの遊びやゲームと出会い、様々な遊び方・遊び道具に出会う。その中で、「運動あそび」ではなぜ、幼児期にその『あそび』が必要なのか、たくさんのヒトと関わっていく手段としてなぜこのゲームが必要なのかを問いかけたり、遊びをより楽しむにはどのような工夫が必要なのか子どもの視点、保育者の視点から学生自身に考えさせたりしながら、学生の遊びの引き出しを増やせるような授業を展開することを心掛けている。

③体験学習サイクルの導入

担当する授業科目では、「実践」「事例」を通じて他者と学び合い、多くの「気づき」や「実践根拠」を得ることを目的としている。これは、現行の学習指導要領における「主体的・対話的で深い学び」「アクティブ・ラーニング」にも通じるものであり、学生の確かな学びを促進させる有効な手法と考えている。グループワークでは課題に対してまずは一人で考える時間を与え、その意見を基にグループワークを行うようにしている。学生自身が遊びを考えたり、課題に対して他者の考えを知ることができたり、また、相手の意見に向き合い、互いに意見を出し合うことで、様々な視点からの気づきや自分自身の課題が発見できるきっかけをつくり出しながら学生の授業に対する意欲が増すように努めている。

4. 学生による授業評価

授業評価アンケートにおいては、「保育内容（健康）」（1年前期）の評価では、授業に対する総合的な満足度をはじめ、ほぼすべての科目において、概ね90%前後の肯定的評価を得ており、学生の満足度も高く、積極的に受講することができたようであった。「健康スポーツⅠ・Ⅱ」（前後期開講）、については、「楽しい体験」が教材として用意されている授業科目でもあり、肯定的評価が概ね8割以上を占めてはいる。また「子どもと健康」においても同様の評価を得ることができた。しかし、季節的な課題である夏の暑さ対策や冬季における低温下での実践等、実施条件の悪さなどへ空調の整った学外施設での展開、天候等に応じた内容変更などの対応はしてきたものの、課題は多く残る。

5. 教育の改善と今後の目標

教育の改善

自らの教育理念と方法の一貫性を確立するため、園児や小学生を対象とした活動研究を進め、運動教室や幼児体育を通じて実践力を高める。そのためにも、園児や小学生を対象に子どもが興味・関心を持ち、遊びを楽しみと思えるような活動研究を進め、親子ふれあい体操や幼児体育などを通して自分自身の経験を積みたい。また、その成果は運動あそびを展開する中で子どもの様子や活動の雰囲気から必要に応じて学生にフィードバックしていけるよう努めたい。

今後の目標

学生の主体的な学びを促進するため、事前学修および事後学修の充実を図る。具体的には、学修内容の振り返りを強化し、授業外および学外での学習機会を増やす。また、学生の興味・関心を引き出す学習教材を開発し、より効果的な授業運営を実現する。さらに、科目間の連携を深め、学びの一貫性を意識したカリキュラムの構築を進める。また、理論と実践の融合を目指し、附属園との連携を強化する。これにより、学生が保育現場での経験を積みながら、学びをより深める機会を提供する。また、指導体験の機会をすべての学生に提供するためのシステムを開発し、学修の機会を均等に確保することを目指す。